

# Deafhood With/Out Deafness-言語と身体の交差する地点

山下 恵理

## 目次

### はじめに

1. 本書の概要
2. 本書の革新性
3. 本書の問題性
4. 本書によるろう文化研究の展望—まとめにかえて

### はじめに

ろう文化という言葉は、今日、一定の市民権を得ているように思われる。この背景には、『現代思想』の臨時増刊号「ろう文化」（1996年4月）の刊行によって、「ろう者」観に、大きなパラダイム・チェンジがもたらされたことがある。この「ろう文化」という概念の確立と浸透によって、聴覚障害者という「健常性」の欠格者として認識されてきたろう者は、手話を母語とする一種のエスニック集団として捉えなおされ、ろう者（のみならず障害者全般）に対する認識に大きな転換が生じたのである。

こうした90年代後半の、日本におけるろう文化的転回（deaf people から Deaf Culture への認識論的変更）は、欧米での一定の議論の積み重ねを前提にしたものである。具体的にいえば、日本のろう文化論は、手話を「音声言語から独立した独自の構造と体系を持つ言語」として分析する手話言語学の創設に始まり、「手話を母語とするエスニック集団としてろう者を学問的に対象化する」という、1950年代以降の欧米の議論の流れを再構成したものなのである。

とはいえ、研究先進地域の欧米でも、ろう文化は手話を母語とするろう者の文化として自明視され、ろう文化という枠組み自体が再検討されることはなかった。本稿で取り上げる、パディ・ラッド著『ろう文化の歴史と展望—ろうコミュニティの脱植民地化』（森壮也訳、明石書店、2007年）は、そうしたこれまでの研究を刷新し、ろう文化研究の画期となったものである。ラッドは本書において、既存の学問における文化

概念を検討しつつ、独自のろう文化理論を構築して、ろう研究に新境地を開いてみせた。しかも、その研究射程は、これまでの文化理論や言語理論を「ろう」というこれまでは徹底的に周縁化されてきた存在の観点から逆照射することで、それらに根本的な態度変更を迫るものにまでなっているのである。

Paddy Lad, *Understanding Deaf Culture: In Search of Deafhood, Multi Lingual Matters*, 2003 は、502ページ（日本語翻訳版は765ページ）を擁する大著だが、イギリスで刊行されるや、アメリカ、カナダ、オーストラリアといった英語圏で間をおかず出版され、日本でも異例の速さで出版されることとなった。ろう文化に関する研究では、最先端地域である米国の状況・歴史を扱った研究・著作が圧倒するなか、イギリスをはじめとするこれまで研究されることの少なかった地域を視野に入れて、根本的なろう文化論を展開していることに大きな注目が集ったためである。

そこで本稿では、本書が広く受け入れられることになったろう文化研究における画期性を説明し、本書がとったろう文化研究のアプローチの理論的枠組みを検討して、本書が開示した、ろう者の身体と言語の問題が交錯する新たな問題地平について論じることとする。具体的には、一章で、著者の来歴を踏まえ、本書の内容を概観し、本書の目的とアプローチ方法を確認する。二章では本書のろう文化研究における意義を検討する。ろう文化研究における統合的な視点を導入し、当事者からの歴史言説の構築を行い、新たな文化理論を提言した点を評価する。三章では、ラッドが定義づけた「ろう文化」概念を検討して、本書が拓きうる、新たな問題地平の可能性を探る。四章では、これまでの章を踏まえて、本書がろう文化研究という一定の対象領域を超えた射程をもつこと、すなわち言語とは何かという根本的な問いを既存の学問の枠組みを超えたところで提示しており、言語研究それ自体に大きな認識論的変更を迫りうる視角を持つことを、筆者なり

の視点から論じることとしたい。

## 1. 本書の概要

本書の著者であるパディ・ラッド (Paddy Lad) は、1952 年ロンドン近郊のウィンザーで、「ろうである度合いが中途半端な子」として生まれた。ろう者と隔離され、聴者と同じ教育を受けて育ったが、大学卒業後、耳が聞こえないという理由から、就職を断られたことで、自身が受けてきた教育、ひいては口話主義に対する疑いを抱くようになった。

ラッドは、英文学、言語学理論、カルチュラル・スタディーズ、ろう文化研究など、複数の学問分野に跨る多彩な研究履歴を持ち、本書における領域横断的かつ実践的なアプローチ方法にも、ラッドの学識の広さが十全に活かされている。加えてラッドは、こうしたアカデミックな分野にとどまらず、レディング大学卒業後、ろう者ととともにソーシャルワーカーとして働き、イギリス BBC 放送のろう者が製作する、ろう者のための番組で司会者を務めるなど、実社会でも多様な経歴を持っており、この経験は本書を単なる学問的な成果に終わらせない魅力を与えることに寄与している。

本書は、ラッドがイギリスのブリストル大学に提出した博士学位論文に、10 年以上の実地調査を踏まえて加筆されたものであり、書籍三巻と DVD 一枚よりなる著者の出版計画の第一巻目である。第二巻 *Journeying through Deafhood* では、ろう文化の現状とその傾向をろうコミュニティから発信することが目指されている。第三巻の内容は具体的には触れられていないが、本書はろう文化概念構築のための壮大なプロジェクトの一環であることがわかる。

本書には、充実した推薦文献や参考文献表、用語と略語の解説が付与されており、ろう文化研究の資料としても、大きな価値をもっている。また視覚障害・肢体不自由などで文字が読めない人のために、電子データを提供するための引換券が添付され、通常の書物では想定されてこなかった読者層への配慮が施されている。日本語版の監訳を手掛けたのは、ろう文化に関する多数の著作と翻訳本をもつ森壮也で、その訳注は原著を日本という文脈で読み解くための格好の手引きとなっている。

本書の章立ては以下に示す通りである。

日本語版に寄せて

謝辞

凡例

用語と略語の解説

序論

第1章 ろうコミュニティ

第2章 西欧文明におけるデフネスとデフフッド—新たな概念的枠組みの形成に向けて

第3章 二十世紀のディスコース

第4章 文化一定義と理論

第5章 ろう文化のディスコースと定義

第6章 ろうコミュニティの研究—サバルタン研究者の方法論

第7章 ろう文化のルーツ—寄宿制学校

第8章 ろう文化のルーツ—ろうクラブとろうサバルタン

第9章 サバルタンの反乱者たちとデフフッド—全国的な広がり

第10章 結論と含意推薦文献

第11章 後記

付録1 慈善の植民地

付録2 ブルーリボンのセレモニーの原稿

付録3 ろうの情報提供者に提示した最初の質問と論題の一覧

付録4 イギリスろう関係団体連絡会議加盟団体

監訳者あとがき

参考文献

事項索引

人名索引

内容を章立てに沿って概観すると以下のようなになる。

序章では、ろう文化研究を行う上で重要な分析概念である、7つの用語（身体モデル、デフフッド、言語文化モデル、植民地支配、マイノリティ文化、ろう認識論、サバルタンおよびサバルタン研究者）を通して、ろうコミュニティの現状と本書の目的が明らかにされている。具体的には、聴者による言語的植民地支配の結果、集団としてのろう者 (Deaf) の文化が収奪されてきた状況が説明されている。こうした歴史的状況を踏まえ、本書のパースペクティブ、すなわち、ろうコミュニティの現状分析を通じた、ろう者に対する社

会的認識の是正、および、新しい文化言語モデルの構築が確認されている。また、聴者による支配的状況から脱却し、ろう文化を理論化するために、デフフッド（構築的主体としての“ろう”）という新しい分析用語を導入している。その際、著者は、既存の学問分野を学際的かつ批判的に利用しながら、一方で、それぞれの学問分野と一般社会での認知を得るために、徹底的に実証的でありながらも、専門性に没入しないよう、平明な執筆によって行うことを宣言している。

こうした目的を受け、一章では、その存在が自明視されてきたため、客観的な対象として検討されてこなかったろうコミュニティを、あらためて成員資格を定義することで同定し、ろう者自身によっては実現しなかった、ろうコミュニティの体系的な把握を行って、その現状を論じている。

二章・三章では、ろうコミュニティの歴史が振り返られる。ここでは、100年間続いた聴者による言語抑圧の実態とろう者の固有の歴史がより詳しく明らかにされている。同時に、これらの抑圧の歴史は過去のことではなく、ろう者は、いまだ治療・慈善の目で見られることが多いとして、こうした一般社会の思い込みの源となっている口話主義（音声言語至上主義）を批判している。

四章では、既存の文化理論が検討され、さらに五章では、四章で検討した既存の文化概念がろう文化概念に不適合であるがゆえに限界を持つことを指摘し、その限界を乗り越えるものとして、批判的エスノグラフィの方法論が徹底的に検討される。

六章では、五章で振り返った批判的エスノグラフィの方法論を、ろう文化研究に反映させる具体的な方法論を論じている。実際には、著者の出自や主観を振り返ることや、インタビュー回答者による妥当性確認が行われている。

七章から九章は、ろう者に行われたろう文化概念に関するインタビューやディスカッションのまとめと、その考察で構成されている。そのインタビューからは、口話主義がろう文化を徹底的に破壊する様相と、そうした状況下でも、ろう者が密かに手話や独自の慣習を引き継いできた歴史が明らかにされている。さらに、考察において、著者は、まさにこうした水面下でのろう者の自己実現こそがデフフッドであり、このデフフ

ッドをはぐくむのは、ろう者の集団そのものにほかならないと述べている。

総合的な結論として、十章では、その存在が疑問視されてきたろう文化の実在性が強く主張されている。その論拠は、ろう者は集団として生きることによってデフフッドを実現でき、さらに独自の慣習や族内結婚が認められることである。十一章では、近年の手話に関する議論がまとめられているほか、いまだ言語的あるいは心理学的分析の対象に留まっているろう者学の今後の検討課題―諸マイノリティ研究とろう文化研究との比較、政治学、抑圧的ディスコースの力学の批判的分析、芸術、歴史、哲学の分野の開拓などが示されている。

上述のまとめからわかるように、本書では、歴史および文化理論全般に関する膨大な量の文献の検討と、著者独自の方法論に沿って行われたフィールドワークによって、ろう文化の理念系の提示と実際の活用が行われている。そして、こうした理論化から、著者は、ろう者の集団性によって独自の歴史、価値観、慣習、言語が守られてきたと結論づけ、ろう者に対する社会的認識の是正―治癒されるべき障害者ではなく、固有の歴史と文化を持つ主体である―を一般社会に迫っているのである。

## 2. 本書の革新性

では、本書は、これまでのろう文化研究にどのようなパラダイム・チェンジをもたらし、既存の文化研究にいかなるインパクトを与えたのか。本章では、その点を論じることにしたい。本書の画期性は、以下の三点であると考えられる。

まず第一点目は、ろうコミュニティの現状を説明するにあたって、これまで散逸的であったろうコミュニティ研究に、新たな総合的視点を導入した点である。具体的には、デフ・アート、メディアとの関係、ろう者のなかのマイノリティ、の四つの分野に基底的な視点を導入し、これら分野に関して散見している研究を、ひとつの文脈から捉えなおして概観している。このことは各分野の研究に、大きく貢献しうるものと考えられる。

第二点目は、聴者側の資料を使いつつ、ろう者の歴史叙述を可能にしたことが挙げられる。とりわけ

ラッドの射程が素晴らしい点は、西洋思想史の起源にさかのぼって、これまで聴者の視点からのみ語られてきた歴史の全面的な改定を求めていることだ。その範囲は紀元前にまで遡り、西洋史における広範な言説を取り扱っており、聖書をはじめ、様々なテクストを取り上げて、ろう者の歴史の概観を見せるに至っている。アリストテレス、ソクラテス、カント、ライプニッツ、デカルト、ディドロ、モンテーニュら、名だたる思想家がその俎上に上がっており、その列挙を逃れる思想家はいないほどである。こうした検討を通してラッドは、もはや誰もその意味を詮索しないほど「当然」となってしまった、「音は思考の媒体である」、という認識こそが、ろう者の差別的思想につながっていることを暴き出している。この点に着目したことで、本書の射程は既存のろう文化研究よりも格段に伸びている。

またそれと同時に、ろう者の言語や集団性、文化に関する議論は、資料的には一統合性を欠いているとはいえず、すでに紀元前から存在することを示すことで、ろう者の言語と集団性の歴史を鮮やかに浮かび上がらせている。この取り組みは、ろう文化研究、ひいては、音を無意識に中心化してきた西洋思想史の根源にまでパラダイム・チェンジを迫るものといえよう。

第三点は、既存の学問における文化理論の検討を通して独自のろう文化理論を構築し、ろう文化概念そのものを再検討した点である。具体的には、社会学、人類学、カルチュラル・スタディーズ、ポストモダニズム、サブカルチャー理論などの領域において、文化理論に関する文献を遍く渉猟し、文化概念の起源とその発展を整理し、ろう文化概念との適合性を図っている。例を挙げると、異なった文化は異なった言語を使っているだけでなく、結果的に異なった世界に存在している、というターナーの言説を理由として、ろう文化がサブカルチャーなのではなく、聴者文化とは独立した文化であると結論付けている。また、伝統的人類学が想定する均質的な文化概念を取り上げ、ろう文化には適合しないことを指摘することで、ろう文化の多様性を浮かび上がらせてもいる。

本書は、このように、ろう文化研究の文脈に文化

論の概念的キーワードを導入することによって、聴者が作り上げた文化概念に関するレトリックを利用しつつ、ろう文化の存在を証明できている。この手法こそ、まさに、本書によって提唱される、ブリコラージュ的手法の実践であり、これまで言語を中心にろう者集団を描いてきたろう文化研究に、「文化的概念」の存在としてのろう者に関する語りを導入することを始めて可能にしたのである。

以上のように、本書では、これまでまったく研究されてこなかった分野や、抑圧時代以前ろう者の歴史に焦点を当て、既存の文化概念の検討を通して西洋思想史そのものに反省を迫り、今まで研究者側から一元的に語られてきたろう者像に対し、ろう者自身が書いた文献に基づく、多能的にろう者を解釈することを提唱した。このように、当事者の視点こそをろう文化研究の軸に据えた点に、本書の大きな意義がある。

さて、ろう文化研究にとって大きな意義を持つ本書だが、「ろう文化が存在する」という結論に至るその手法には、いくつかの問題点も見受けられる。続く章では、こうした本書の問題を検討する。

### 3. 本書の問題性

前章で明らかにしたとおり、本書は、既存の文化理論における文化概念に関して緻密な検証を行い、文化理論のタームをろう文化研究に援用している。しかしながら、ラッドが本書の結論部分にて導き出した、ろう文化の実在の証明や、ろうコミュニティの成員としての条件づけは—おそらくはラッドの意図に反して—既存の文化理論と同様の本質主義に陥ってしまっている面がある。たとえば、ラッドは、伝統的人類学における均質的な文化の定義を否定し、ろう文化概念の創出には適応できないと評定したにもかかわらず、ろう文化が正当な文化概念であるとするその根拠には、まさに伝統的人類学における均質的な文化概念—具体的には、独自の信念、規範、価値観、族内婚、独自の言語の存在などであり、エスニシティにいたっては血縁関係が強調されてまでいる—が密輸入されてしまっているのである。

無論、ろう文化とは何かという問いが前提になっている以上、その帰結が本質主義的にならざるをえ

ない部分があるのは当然だろう。しかし問題は、こうした本質主義的な「傾向」ではなく、より本書の根幹に関わることである。というのは、ラッドは、新たなろう文化概念を構築するために、デフフッドという概念を導入して、構築の主体としてのろう者像を描こうとしたはずであるにもかかわらず、そのデフフッドによって構成されるはずのろう文化が本質主義的なものになっており、そのために齟齬をきたしているのである。とりわけ、血縁を強調するエスニシティに関してはそうである。つまり、ろう文化やエスニシティ、ろうコミュニティの成員の規定と、こうしたデフフッドの構築性は、矛盾しながら本書に併存してしまっているのである。こうした語意的対立があることは、用語の混乱にほかならず、ひいては本書におけるろう文化の議論の整合性が破綻していることを物語っている。

しかしここで重要なのは、一度は伝統的人類学の均質な文化概念を否定したラッドが、本書の重要な結論に、これらの用語を利用しなければならなかったのかという理由を考えることにある。この点を検討することにより、むしろ本書の潜在的な可能性を導きだせると思われるのだ。

考えてみれば、ラッドの本書における目的は、ろう文化の実在を証明することにあり、それはすなわちろう文化の存在を否定する議論の反駁であった。そのために、いわば「相手の土俵」としての聴者が作り上げた学問領域で議論する必要があり、それゆえに、ろう文化の定義は、あえて批判的論客たちが使ったのとまったく同じ言葉―「共通の価値観」、「族内婚」、「血縁関係」など―を採用したのだと思われる。言い換えれば、マイノリティ側からの自文化に対する言説を「戦略的本質主義」と位置付けたラッドは、文化に本質を措定する方向に進みすぎる危険性を考慮しつつも、まずは何よりも反論の語りそのものの存在が認められるための学術的空間を設定するために、ある部分、批判者たちの言説に乗っかるかたちで、本質主義的に「ろう文化」の定義を行わざるをえなかったわけである。

マイノリティは、往々にして、自らの文化について語る際、その存在を立証する責任が課せられる。そしてラッドは、本書で、戦略的本質主義を取って

「文化」を定義することで、ろう者の独自の生活様式について記述することを可能にした。その意味付け自体は本質主義的であっても、それは「語るための場所」を確保するためのカウンター・ナラティブであり、構築的な概念たるデフフッドと緊密な関係を結んでいる。つまり、両概念が矛盾して提示されているのは、それらが「ろう者とは誰で、本当に文化的存在なのか」と本質主義的な問いを執拗に重ねてくる支配者ディスコースへの抵抗として措定されているがゆえなのである。

これまでのろう文化理論には、手話の母語話者をコミュニティの成員とするため、コミュニティ内部の多様性―ろうコミュニティは手話使用者だけからなるわけではない―を抑圧して画一化し、手話母語者以外の発話を排除しかねない限定性があった。ラッドは、そうした画一的なモデルを修正し、ろう文化の成員資格は流動的であって、ろう文化やろうコミュニティが様々に開かれているのを示すことで、「ろう」の意味をオープンに論議できるような多元的な場にする端緒を開いたのである。本書の言葉に即して言えば、この試みは、Deafness から Deafhood への転回、と言い換えることができる。

さらに、このように二つのアプローチ方法の矛盾をあえて残すことは、よりろう者のおかれた状況が鮮明にする効果があると思われる。つまり、本質主義的でありながらも、一方で構築主義的でなければならないというろう文化とデフフッドの対立は、ろう者がアイデンティティを構築する上での問題そのものを本書が写し取っているということであり、この矛盾に気づく読者は、まさにそうしたろう者の現在を迫体験することを可能にするからである。

著者は、以上のような取り組みを通して、既存のろう文化理論を一步前へ進めていると思われる。さらには、「ろう文化」と「デフフッド」を切り離して考えることによって、これまでの「ろう文化」理論が焦点を当てられなかったろう文化理論の境界性を取り除こうと試みたのだといつてよい。つまり、本書の問題性は、同時に本書の意義であり、可能性にほかならないのである。

こうした可能性は、本質主義への問いには還元しきれない、より根源的で大きな問題へとわれわれを

導いてくれる。

#### 4. 本書によるろう文化研究の展望—まとめにかえて

本書がこれまでまったく研究されてこなかったろうコミュニティの現状や抑圧時代以前ろう者の歴史に焦点を当て、今まで研究者側から一元的に語られてきたろう者像に対し、多元的なろう者解釈を提唱したことを論じてきた。また、本書では支配的ディスコースに対抗する戦略的態度をとりつつ、それを利用してろう文化・ろうであることの境界性を取り除く試みが行われていると述べた。その意味で、ラッドの目的は十分に果たされたといえることができる。

しかし、さらにラッドの議論からは、以下のような問いをさらに拓くことができるのではないか。それは、なぜ支配的ディスコースは、矛盾する概念規定を使うことでしか、ろう文化を語るができないような状況を「ろう者」に押し付けしてきたのか、ということである。言い換えれば、なぜ「ろう者」の文化を否定し、手話を音声言語よりも劣ったものとする認識がこうも簡単に、無意識的に繰り返し刷り込まれてきたのかである。そしてそれは、支配的ディスコースがなぜ「ろう者」の文化をこれほどまでに否定し、手話を音声言語よりも貶める認識を行ってきたのかという問題へといたることになる。

まず、前者の問題に関しては、支配的ディスコースにおいては、ろう者は「障害者」として位置づけられ、母語が収奪され、反論の語りもできないほどにコミュニティが破壊されてきたことが挙げられよう。だからこそ、本書は、文化理論の言葉でろう文化を語れるようアカデミックな検討を行い、かつ、既存の学問領域に飲み込まれないよう「ブリコラージュ」的な手法を選択したのだった。

後者に関しては、ラッドは支配的ディスコースを論駁して、ろう文化が実在することの論証に集中するあまり、本書では言及されることがなかった。たとえば、アリストテレスの「聞くとは、音を知覚することであり、音は思考の媒体である。したがって盲人はろうあ者よりも優れた知力を持つ」という言葉を取り上げ、支配的ディスコースに位置づけて批判してはいたが、そもそもなぜ、「音が思考の媒介」となることが、これほど無批判に受け入れられてきた

のかということにまで議論は進められていないのである。「耳が聞こえない身体」を「障害」として捉えてきたことこそが、ろう文化否定の根源にあり、それゆえにカウンターナラティヴを立ち上げなければならなかった根源的理由であるはずにもかかわらずである。

すると、本書のカウンター・ナラティヴの意義を認めつつも、「対抗」だけに終わらないかたちで、ろう文化のありようと可能性を示すのに必要なのは、「聞こえない」という身体と、ろう者の母語である「手話」を行う身体の関係性への視点であると思われる。実際のところ両者は同じ身体であるのにもかかわらず、ラッドの議論ではそこが切り離されている。

このことは、「聞こえない身体」は「障害」であるという前提を、ラッドの意思に反して、支配的ディスコースと共有しているようにさえ見える。裏を返せば、デフネスという身体性は、必ずしもろう文化という概念によって規定されることのない、よりオープンな概念であることが本書では語られていないのである。もちろん、この言明は、ラッドが批判するであろう、聴者のろう者に対する既存の偏見に、接続されかねない危険性を孕んでいる。だがむしろ、これまでのろう文化研究が、この点を問うてこなかったことに、支配的ディスコースの相変わらずの蔓延を許している一因があると思われるのだ。手話を行う身体から、聞こえない身体を引き裂き、障害として一元化することで、身体と言語に関する重要な議論を隠蔽され、聴者の差別的まなざしを増長させているのではないかと。

ラッドは、本書において、既存の文化理論を相対化しながらも、現在までのろう文化理論の中で、なぜ「手話」が中心となってきたのかという問題に取り組むことがなかった。文化を戦略的に定義するためには限定性が必要なのは理解できるものの、あるひとつの文化存在性を主張するために、言語とエスニシティがあたかも透明であるかのように結び付けられるのかという、議論の余地のある問題が置き去りにされてしまった。というよりむしろ、ラッドは、成員資格をめぐる議論やサブカルチャーを評価する議論において、ろう文化概念の中心に手話を位置づけており、その意味で、本書は「民族＝言語話者」

という、現在では様々な批判がある歴史的制約にとらわれていることを指摘せざるをえない。

もちろん、繰り返すように、この制約は意味のない限定ではない。デフフッドという概念を生み出すのに必然的な限定性であって、そのことで、ろう文化の範疇化は、マジョリティ文化に基づく範疇化のように、排除と包摂の無限ループに陥ることを回避しえたのだった。しかし、ろう文化の存在を証明するための論拠となった、「言語とエスニシティ」の透明な関係が疑問に付されている今、そもそも集団の共有性として「言語」をあげ、community と communication の関係性(具体的な事象に即して言えば、ろうコミュニティとその構成員をつなぐコミュニケーション方法としての手話)を言語として位置づける、その定義自体を批判的に考える必要があるように思われる。

「手話は言語である」という発見は、無意識に「手話は(音声言語に匹敵する)言語である」という支配的ディスコースにおける承認を求めるものであり、手話は音声言語と同等に言語であると主張する一方で、音声言語によって囲い込まれてきた言語の枠組みのなかに、手話を封じ込める行為であるという厳しい認識に立つとき、本書はあらたなろう文化研究の地平を開示することになる。それは、「音=声」を媒介することで権化されているコミュニケーションのあり方に対する根本的な疑義の突きつけである。そして、その試みは、これまでの言語観念を根本的に変更して、手話こそを前提にしたあらたな言語学の創出と相即的なものであるはずだろう。

とすれば、現在必要なのは、手話を音声言語学から手話学自体に奪回することである。そのためには、本章の冒頭で述べたろう者の身体を、その議論の根幹に関わるものとして見据える必要がある。それはまだ誰も手をつけていない未知の領域だが、その意味では、耳が聞こえない・手話が使われる場であるろう者の身体とデフフッドを接合しつつ、支配的ディスコースの閉鎖性による暴力と、私たちにとって言語とは何かという根源的な問いと、「聞こえない身体」への着眼の重要性を私たちに教える本書の意義は、ろう文化研究における新たな理論的・実証的堡壘を確立したことともに、強調してもしすぎるこ

はないだろう。

(やました・えり 東京外国語大学大学院博士前期課程)